

OPINION

ナビゲーター

メキシコ編は終盤に入り、日本とメキシコの架け橋となつた人物を紹介する。日本の外交官、漢詩人、堀口九萬一(くまいち)である。九萬一は、詩人堀口大學の父という方を通じるかもしれない。九萬一は慶応元年(1886

5年)1月28日、長岡藩士の父と母千代の長男として生まれる。千代は、長岡城の裏手で出産する。3年後、父は戊辰戦争で落命、母は逃げ延びるものの、その後長岡は凶作などの危機的状況が続く。九萬一は、幼い頃から武士道精

期待
日本への
世界各地から

其 43

メキシコを救った日本人

神の誇りを持ち、12歳で漢詩や中国文学を読み下した。長岡の裕福な人たちは、勉学を続けるため資金支援した。

一方、太平洋の反対側では、ポルフィリオ・ディアス將軍が1877年から80年まで憲法上メキシコの大統領職を務め、その後も84年から1911年まで大統領職にあつた。

堀口九萬一は14歳から小学校教師として働き始める。18歳で高校入学、江坂マサと交際を始めるが、1885年、

激動の20世紀初頭

司法省法学校(後の東京大学法学部)の入試のため、辞職を決意。90年学生のまま長岡でマサと結婚、二人で上京。

大学の近辺に居住、92年に長男・大學が、94年には娘ハナエが生まれる。日本のキャリア外交官第一世代の試験に合格し、29歳で朝鮮の仁川に派遣される。

1895年、妻が結核で亡くなり、二人の子どもは長岡の母に預けられる。閔妃暗殺事件に関係した疑いで外務省から解雇、法的・職業的危機

に直面、広島刑務所に収監されるが、96年に無罪が確定し釈放される。

その後、オランダ、ベルギーで勤務、1899年には後に結婚するステイナ・リグーアと出会う。ステイナと東京に戻り、外務省一等書記官に昇進、後ブラジルに派遣。1904年から05年にかけての日露戦争で使用された2隻の軍艦の取得をアルゼンチンで担当する。堀口一家は05年までブラジルに滞在、その後東京に戻る。

1909年、九萬一はメキシコ大使館に一等書記官として着任する。当時、日本とメキシコは、貿易、移民、投資、航路などでますます緊密で互恵的な関係となつた。メキシコ独立100周年記念式典で、外国政府展用として唯一、日本のみが国立歴史博物館の新館を10年8月から2カ月間、使用を許され、工業製品、美術品、農産物を展示した。日本から代表団が送られ、堀口九萬一日本大使館臨時代理大使は、ディアス將軍をクリスタルパレスの日本館に迎え、演説を行った。数日後大統領府で豪華な晩さん会が開かれ、50万人の市民が独立記念日のパレードを祝った。この日メキシコの夜は「夜のない城」として輝いた。

その直後、メキシコは大きな不安のどん底に落とされ、1910年11月コアウイラの地主で実業家のフランシスコ・I・マデロが率いるメキシコ革命が始まり、35年間続いたディアス体制に終止符を打つことになった。11年5月ディアス將軍は大統領を辞任、パリに亡命する。マデロは民主的に大統領に選出される。政情不安は収まるところを知らず、クーデターが続く。

【フーマンウルフ(UNA Mビジネススクール教授)、リーム中産連】

(月曜日に掲載)